

## エッセイ 松 永 拓 己

洋画・版画  
熊本大学教育学部美術科准教授

最近、とあるライブの音楽を聴く。音階に予想外の展開があると、「おっ」と感銘する。なぜ、その音をそこに入れるのか？ 聞きなれたメロディに優れた即興音が入ると私の芸術観が動き出す。素敵な音楽がさらに魅力を伴って聞こえる。

私には、以前から美術における「くずし」へのこだわりがある。美術だけではなく、芸術全般に亘って、私が気に留めていることかもしれない。

絵画の基本にデッサンがある。これは、例えばギリシャ彫刻などの石膏像モチーフを見て正確に描くことがその目的である。私が高校生時代の石膏デッサンを百枚描け、などと言われていたものであり、それにより描写力を養い、確かな力量としていた。そのような修練のおかげで正確に描く力を付けたものである。正確に描けることは素晴らしいことである。

しいことであり写実への道である。「自然を師とせよ」は『絵画論』においてレオナルド・ダ・ヴィンチも言っている金言である。絵を描く場合に、物を見つめてそれに沿って描写することは正しい行いである。絵画の基本として推奨することであるし、頑張って越えねば



ならないことであろう。絵画を行う若い人は特に、我武者羅にでもデッサンを積んでほしい。

さて、それが絵画のすべてでないことが厄介である。美術には写実という実物に正確な描写を突き詰めていく美があり、分かり易い。その反対に、実物から遠ざかるが美となる悩ましい芸術観がある。それを「くず

し」と言わせていただく。

これは、正しい正しくないで計れないことが厄介である。多くの人が人生の或る時にぶつかった芸術観であるだろう。正解が或る一点に存在するならばそこを目標せよ。写実はひたすらに真っ直ぐに描写力を突き詰める努力を行う。くずしの美は実物から離れることで美を伴う。色や形、

遠近感、立体感、量感、質感、プロポーションがくずれることで違和感が生じそこに美が生れている。正しいお手本に対して乖離すること、見たこともない

味わいを齎している。多くの例があるが、ゴッホしかり、マティスしかり、モディリアーニしかり……。誰があのいびつに歪めた、所々色の外れた絵を素敵だと気付いたのだろうか。

くずしは難しい。ただの変ではダメなのである。どのようにくずすかは、答えは無いし、もっとも、初めから答えがあるようなもの



カット・上野 豊

ならば大したことではない。人間の感性のギリギリの判断で止めるし、付け加える。そういった作品を鑑賞するとき、どうしてこまでなのか、なぜこの色をここに置いたのか、なぜここを……と、絵の前で制作者との推理合戦である。しかし、そこにはカッコよさがある。芸術の底流にあるこの小粋なカッコよさは、答えない美の表出を自分の感覚で挑み、整え、そして実体から離れる不安感と格闘し、いきなり訪れる筆が終わるはずの一瞬を逃さず完成させることにある。マティスは、「正確さは真実ではない」とし、自己の見つめる真実を描いたらマティス画になったという。

いかなれば、デッサンをしていたらそのように心の眼で見えたというわけである。究極はもはや意図的にくずしていない。(心の眼で) 見えるとおりに描いたということになる。一流芸術家の眼は、正の基本型を凌駕してしまいうずしを起している。なぜ、そのようにくずせるのか。正を極めて奇が生じる。芸術家は意識的、無意識的にかかわらず、程よい、個性的なくずしを持って恰好を決めているようである。やり過ぎず、足りな過ぎず、心に刺さるが、後味の良い新鮮な表現感覚を見せている。くずしは洗練された一つのセンスである。

カッコのいい芸術には、不思議な感覚を覚える。目まぐるしく展開する芸術家の感性のもたらす「くずし」は感覚をざわめかせる。そんな音楽を聴き、舞を見、詩を噛み、立ち姿を感じながら、新たな創作活動をはじめ。

朝の目覚めは爽快。誰にも邪魔されず、五時になると自然と目が覚める。目覚まし時計は不要。寝室の厚めのカーテンが、朝の陽射しを遮断しているが、東南の高窓のカーテンの隙間が薄ぼんやりと明るい太陽の光を捉えて、充足した眠りのご褒美としてくれている。

大きく伸びをして、テレビのスイッチを入れる。

一人だと気遣う相手がない分、動作が大きい。肌布団を足で引き下げ、エンジン起動。「今日は何月何日だ？」カレンダーに目をやりながら、朦朧とした頭に昨日の出来事と今日の予定を引きずり出す。

一人暮らしになってからの毎朝のローテーションだ。数字のみの暦の今日に「○」を付けて、今日の予定。為すべきこと、行うべきこと、手帳を見ながら確認。

エッセイ 星子邦子

（環境文化 NPO法人ワークショップ「いぶ代表」）

いや今日行くところある・することがある：予定があることが、どれだけ幸せなことか：後期高齢者になると一日一日が大切なのだ。「今日は閑」と考えてない。「ぼんやりする」ことも大切な今日の一日なのだから：どう過ごすのか、は、とても大切。「意識」があ

もチェック済み。だが、一番肝心なのは「他に忘れていないことはないよネ」と確認ができていないこと。一人の良さもあるが、一人の不便さも大きいことに気付く。不安は他人に話すことで軽減することもあるが、一人で抱えることで、不安が倍増して重さが倍になる。

こころ穏やかなりし……

るか、無いかで、同じ二十四時間が大きく変貌するのだ：と思う。

「こころ穏やかに暮らす」とは、どのような状態で暮

らすことなのだろう：「心配事のない暮らし」ということだろうか：お金についての不安、健康についての不安のない暮らし。仕事がいまうまくいっていること。家庭内・地域間の人間関係がスムーズであること：等々：

しかし、それだけで心穏やかになるだろうか。テレビを見ると、心穏やかとは言い切れないトラブルがこれでもか！と取り上げられている。まるで関係のない人々が一億総評論家となり「ああでもない」「こうでもない」と言い合う様子が映し出される。他人の事だから自分の言葉に責任を取られる訳でもなく、気軽に感じたままを話しているというイメージ。そして、また、そんなことを、見るでもなく見ている自分がイヤになる。

自分とは無関係な事に興味を持ち、首を突っ込み、心穏やかな朝の自分を、わ

ざわぎうっとおいしい気持ちに落とし込んでいるのである。リビングから朝露が眩しい庭に下りると、花期が終わって雄蕊だけを残した百合の花が「もう終わったのだから」と、花芯の剪定を催促する。六月は春の花が終わって、夏の花と交代する緑の多い時期だ。朝のコーヒーを飲みながら、庭の緑の一片づつに声掛けしてみる。

「こころ穏やか」であれば、緑の葉も同じように応えてくれるはず、その声も聴き取れる筈だと思うのは単純人間の短絡な思考回路によるものだろうか：多くを思わず「今」を捉えると、心穏やかで居られる。

いつも穏やかで居たいと、思い願うことから、平静に近づけると思うのは、平静になれない高齢の女の「あがき」かもしれない。



カット：上野 豊